「あったか南国市」づくりについて市長と語る会

2月22日、「あったか南国市」づくりについて市長と語る会（以下、語る会）が、浜田純市長をはじめ、岸本敏弘企画課長、久万保夫総務課長及び佐竹茂務課長補佐兼係長、ならびに委員11名の参加により開催されました。

会では、第1回目のテーマ、南国市の「防災」について、防災を担当する久万課長及び佐竹課長補佐兼係長より、①南国市の災害に対する計画書「南国市地域防災計画書」、②防災情報連絡体制、③災害時におけるテレビや新聞社など各報道機関との避難情報や緊急な防災情報などを市民に伝達するための協定や県内市町村災害時相互応援協定などの防災に関する各協定、④南国市及び高知県の南海地震に対する考え方、⑤南国市の現在及び今後の取り組みなどについて、約1時間にわたり説明を受けた後、質疑や意見交換が行われました。

（以下、内容はあらましです）

市長

いろんなテーマがある中、防災についてということで、数々市政には課題がありますが、極めて重要な分野です。

平成10年'98豪雨では、大変な大水害に見舞われました。このような水害から市民県民を守ろうと県内各地で防災工事が行われています。

南国市に関係のあるものは原因となった国分川舟入川の災害復旧です。国の特別措置を受けて、15年度に終了予定ですが、一部予算を繰り越して、国分川舟入川本線以外にも支流や本線を守っていく上で必要な工事を積み上げる方式で、300億円を超す事業が行われています。

市独自の対応としては、新川を本格的な排水幹線にする工事、また、崖崩れ住家防災対策を実施しています。地震対策は、小学校の耐震調査、そして必要な耐震補強を優先していますが、保育所でも行っていきたいと思っています。それから市内各地で自主防災組織の結成が進んでいます。しかし、国の三位一体改革で、地方への交付金がどんどん削減されており、予算が組めない。組めないから組まないというわけにはいきません。

いかに財政が苦しくても防災予算は確保しなければならないということで取り組んできましたが、準備を進めていました明見地区の都市排水ポンプ場の設置を含む内水排水対策の財源調達ができません。3～4年間、国の進めているこの改革時期の動向を見極めながら再着手をしたいと考えています。

皆様方がこうした南国市の選択をどう思われるのか、ぜひ話していただければ私も大変ありがたいと思っております。同時に、今後の防災対策について率直なご意見をお聞かせください。

語る会会長

久万課長は、わかりやすく説明していただいたと思いますが、いっぺん説明を聞いただけでは、また資料を見たぐらいではどうも理解できません。それだけ範囲も広いし、中身も濃いです。多種多様の見方と対応が要求されると思

いますが、委員さんが分かりやすい資料を構えてきてくださっておりますので、これについて説明をお願いします。

語る会委員

「イザ」というパンフレットと「あのとき私は」という、'98年の高知水害被災障害者調査報告書をお回ししました。パンフレットは、'98豪雨の直後、県の障害福祉課の方から、各障害者団体、痴呆性老人を抱える家族、それから施設の職員とか、関係者に障害者支援のためのマニュアルを作ってくれないかということで、私を含めこれらの人たちによるマニュアル検討委員会がつくりました。

'98豪雨の時には、障害を持った方も被災されています。ある所では、自閉症のお子さんを連れて学校の講堂へ避難したら、お子さんがパニックになって騒いだらしく、他の被災者から、「みんな避難している所へ障害を持った子どもを連れてきて」と言われたそうです。お母さんは泣く泣く洪水の中を、歩いて自分の家に帰っています。

また、避難場所に身体障害者用のトイレがない。我慢できなくなり家に帰った。そういうことが実際の話としてありました。

そのためにパンフレットには、より市民の方に各障害の理解や、障害のある方とサポートする方のためにということが入っています。災害弱者というのはお年寄りもそうですが、私が調査した地区では、お年寄りに対する支援は、災害発生後3～5日以内に安否確認が終わっています。

一方、障害者の安否確認は1カ月以上かかっています。障害者の方がどうして時間が遅れたのか、実は阪神淡路大震災時も同じですけども、基本的に秘守義務の問題があります。予想される南海地震の時には、障害者避難・支援はどういった形になるのか少し気になっています。

語る会会長

どうもありがとうございました。ちょっと聞いたことはありますが、こういった資料が実際作られているのは初めて見ますし、非常にショッキングな感じです。

皆さんそれぞれの意見をざっくばらんに出していただけたらと思います。

災害弱者への対応を

語る会委員

私は、津波避難計画の作成が一番大事じゃないかと思います。これはある種、地区が限定されますけれど。

なぜ大事かと言いますと、自然災害は特に避けれるものでないし、強固に構造物を作っても自然の力の方が大きい。一番大事なことは普段からの市民一人ひとりの災害に対する意識の向上じゃないかと思います。そういう取り組みをしたらいいんではないかなと思います。

語る会会長

自分の次男は小学校6年なんですが、学校では避難訓練などが再々行われているようです。また、各地域で自主防災組織がだんだんにできています。

今盛んに公共の建物は、耐震補強していますね、特に学校ですとか。莫大な費用がかかるわけですよね。テレビやタンスがひっくりかえらないように、壁に固定をしたり、それほどの予算がかからず済むものもあります。

そんなことについてもどうでしょうね。

語る会委員

家族単位で避難訓練をすること、近所のお年寄りやできれば障害者のリストの作成、また、災害が起こったときに、リヤカーやスコップ、小型ジャッキ、脚立などが置いてある場所を知っておく、そして、若者がみんなレスキュー隊になってほしい、そんなことをテレビで言ってましたね。

私は、地区の防災会の活動組織名簿をもらっていますが、その中では給食当番で、もし何かのときにはおにぎりを握るとかを決めています。

語る会委員

私のところの防災会は役割は決めていますけど、そういうものは全員には配ってないです。

語る会委員

自主防災組織を強化していくことが大事だと思います。地元のことは、地元の人が一番知っている。逃げ遅れそうな人や身体障害者の方たちを助けるにはどこにまわればいいのか、知ることができるのは自主防災組織だと思います。

津波の避難計画にしても、近い安全な場所を地元が一番知っています。僕も消防の団員ですが、例えば、「近所の誰々をちょっと気にかけちょいてや」「こういう川が大雨の時に溢れるかもしれんき気をつけて見ちょってや」とか、幹部から団長を通じて言われたことは結構覚えていますからね。そう負担に思うほどのことではないと思います。その程度のことだったら、地元に密着した形で事前に何かできそうな気がするんですけど。

語る会会長

やっぱり消防団なんかは一番身近で頼りになる存在だと思います。